

黙示録3章7-13節 「開かれた門」

1A 聖なる、真実な方 7-8

1B ダビデの鍵を持っている方 7

2B 少しばかりの力を持つ教会 8

2A 教会を愛される主 9-10

1B 偽ユダヤ人に対する勝利 9

2B 全世界の試練からの守り 10

3A 主の来臨 11-13

1B 自分の冠 11

2B 神殿の柱 12

3B 御霊の語られること 13

本文

黙示録3章7節からです。フィラデルフィアにある教会に対するイエス様の言葉を読みます。(7-13節を読む)

フィラデルフィアは、前回学んだサルデイスの町から南東、約45キロにある町です。アッタロス朝ペルガモン、つまりペルガモン王朝の町の一つです。覚えていますか、ペルガモンにある教会について私たちは既に読みましたね、が首都で、フィラデルフィアはその王国の一つでした。ギリシア帝国のセレウコス朝の中からでてきた王国です。エウメネス二世という人が建設しました。弟アッタロス二世を後継者としました。彼の別名が「フィラデルフォス(Philadelphos)」であり、ここからフィラデルフィアと呼ばれます。「兄弟を愛する者」という意味です。そして、ペルガモンの教会の学びの時に話しましたが、後に同盟国であるローマに王国を寄贈し、ローマ帝国の一部となります。大きなローマ街道が、トロアス、ペルガモン、サルデイス、そしてフィラデルフィアに通じており、それゆえ通商路として栄えていました。

この町の特徴は、ヘレニズムすなわちギリシアの前哨基地であったことです。広くて、低いところにありますが、防衛のしやすい所がありました。それで、小アジアの中で、紀元後1390年までオスマン・トルコの手には落ちなかったそうです。ギリシアの前哨地ということで、そこにはギリシア文化が豊かにありました。しばしば、「小



アテネ」と呼ばれていたそうです。ギリシア神殿や公共の建物がたくさん建てられていました。ですから、ギリシアの神々を祭った神殿も多く、ここはぶどうの産地で、酒と陶醉の神ディオニュソス礼拝の中心地となっていました。それで、フィラデルフィアの人たちにとって、「門」はとても身近な存在です。敵から守るため門がありますが、門を開けている、閉じられているというのはとても重要な意味を持ちます。

そして、ここは地震の多いところでした、断層の真上にあつたからです。紀元後 17 年の大地震によって、この町は徹底的に破壊されました。その復興に皇帝ティベリウスが援助したので、皇帝に感謝を表して、その町は新たに「ネオ・カイサリア(新カイサリアの意)」と、新しい名を付けました。ですから、後でイエス様が「あなたがたは、柱としよう」とか、「新しい名を書き記す」という約束を与えられますが、ここにいるキリスト者にとって、大いなる励ましと慰めになったでしょう。神殿や会堂など、建物の柱には、その建物の建築に貢献した人や、町に貢献した人の名が刻まれています。柱や名も、彼らには身近な存在だったのです。

1A 聖なる、真実な方 7-8

1B ダビデの鍵を持っている方 7

⁷ また、フィラデルフィアにある教会の御使いに書き送れ。『聖なる方、真実な方、ダビデの鍵を持っている方、彼が開くと、だれも閉じることがなく、彼が閉じると、だれも開くことがない。その方がこう言われる—。

イエスは、他の七つの教会と同じようにご自身の姿を紹介されます。ただ、ここでのご紹介「聖なる方、真実な方」は、1 章に使徒ヨハネに現れた栄光の御姿の中にはでてきません。けれども、聖なる方ということも、また真実という言葉も、旧約聖書からずっと神ご自身に使われている言葉です。そして、黙示録に出てくる言葉です。6 章 10 節には、神の言葉とイエス様の証しを立てて、それで首をはねられた魂が叫んでいる言葉の中にあります。「聖なるまことの主よ。いつまでさばきを行わず、地に住む者たちに私たちの血の復讐をなさらないのですか。」

聖なる方、真実な方ということは、中傷され、迫害され、殉教した人々にとって、欲していた神のご性質であったということです。聖なる方とは「別たれた」という事ですが、他の全てとは別たれていて、全く悪がないということであり、「悪があるのに、どうして聖なるあなた様が裁きを行わないのですか？」ということでもあります。そして、真実というのは、裏切らない、約束を守る、確かに愛しておられて、守り、報いてくださる、だから信頼のおける方だ、ということでもあります。後で、この教会の聖徒たちが、ユダヤ人たちに中傷を受けていたことが書かれています。そうした迫害や中傷に対して、主は、ご自身が全く、そのような支配から離れており、その上におられる方であり、ご自分のみこころをことごとく行うことができる、ということです。世の中で悪があると、どうしても神が見えなくなります。しかし、神はそのような流れから隔絶された方であり、必ず、ご自分の正しさに従

って、悪を裁いてくださる方です。裏切らない、真実な方です。

そして、「**ダビデの鍵を持っている方**」とあります。これも、1章のイエス様の姿には出てきません。これは、イザヤ書にある神の約束から来ている言葉です、読んでみましょう。「22:20-24 その日、わたしはわたしのしもべ、ヒルキヤの子エルヤキムを召し、21 彼にあなたの長服を着せ、彼にあなたの飾り帯を締め、彼の手にあなたの権威を委ねる。彼はエルサレムの住民とユダの家の父となる。22 わたしはまた、彼の肩にダビデの家の鍵を置く。彼が開くと、閉じる者はなく、彼が閉じると、開く者はない。23 わたしは彼を杭として、確かな場所に打ち込む。彼はその父の家にとって栄光の座となる。24 彼の上に、父の家のすべての栄光がかけられる。子も孫も、すべての小さい器も、鉢からすべての壺に至るまで。」これは、エルサレムに対する神の預言でした。王ヒゼキヤに仕える二人の側近がいました、シェブナとエルヤキムです。シェブナは、自分の報酬のことばかり考えていました。自分が老後、安泰に暮らし、荘厳な墓に入るようなことばかり考えていました。アッシリアがエルサレムを取り囲むような危機にあったにも関わらず、です。しかし、エルヤキムは違いました。主を求めルヒゼキヤに忠実に仕えていました。その忠実のゆえに、ダビデの鍵が渡される約束が与えられたのです。

鍵が何を意味するのか？ここに、「**彼が開くと、閉じる者はなく、彼が閉じると、開く者はない。**」とあります。エルサレムという城であります、その門の鍵を持っているということは、その町の運命が彼に掛かっていることを意味していました。門は、外敵が攻め入って来る破れ口にもなりません。日没の前に必ず閉めます。その後で遅れてやってきても、絶対に門を開けることはありません。そして日が昇れば、再び開けます。つまり、エルサレムの全権がその肩に任せられている、ということです。エルヤキムが忠実に仕える者であったので、主が彼の肩にダビデの家に関わることを任せるという約束でありました。しかし、エルヤキム個人への約束を越えて、彼はメシアについての約束へと発展しています。ダビデの家について、エルサレムについての全権を持っておられる方が、イエス・キリストなのだということです。神の国、また新しいエルサレムに入る権限を、すべてイエス様が持つておられる、ということを表しています。

2B 少しばかりの力を持つ教会 8

⁸ わたしはあなたの行いを知っている。見よ。わたしは、だれも閉じることができない門を、あなたの前に開いておいた。あなたには少しばかりの力があって、わたしのことばを守り、わたしの名を否まなかったからである。

主は、フィラデルフィアに対して、スミルナと並んで叱責の言葉は与えられておらず、評価しておられる言葉だけになっています。なぜ、その行ないをほめる言葉だけなのでしょう？迫害です。不信者のユダヤ人から、その会堂から中傷を受け、また追放されていたという背景があります。

当時のローマ社会は、カエサルを神とする皇帝礼拝によって忠誠心が図られていました。「カエサルが主である」という告白が、云わば踏み絵でした。それをすることができないのは、ユダヤ人とキリスト者です。主なる方のみが主であり、カエサルは人であり、人を神とすることはできない、偶像礼拝であるからです。しかし、ユダヤ人共同体はローマ社会の中で社会的地位を得て、この言葉を告白しなくてよいように、除外してもらっていました。そこで、既に煙たい存在であったキリスト者に対して、彼らに対して会堂への戸を閉ざしたのです。

キリスト者は、初めはユダヤ教の一派「ナザレ派」でありました。それから異邦人も教会の中に集い、安息日を守らなくもよいということがあり、それでユダヤ教がイエスを信じる者たちを疎外するようになっていきました。そして何よりも、割礼を受けていない異邦人が、そのまま教会が受け入れていました。ユダヤ人だけに与えられていた特権が、会堂に異邦人を入れることで壊されることを恐れたのです。自分たちの共同体を守るためにキリスト者を追い出しました。彼らの前に、戸が閉ざされていました。会堂はコミュニティーセンターのような役割を当時は果たしていました。会堂の戸を閉ざされことは、彼らの共同体から外されることを意味していました。覚えていますか、それは、あの生まれつきの盲人が会堂から追い出されたことと同じです。目を癒やされた彼が、ユダヤ人議会であるサンヘドリンの前で、イエスが神から来られた方であることを大胆に告白したために、追い出されたのです。しかし、その後でイエス様が来られて、彼の前にご自身が神の子キリストであることを明かされて、彼は主を礼拝したのです。(ヨハネ 9:34-38)

ですからイエス様が、「わたしは、だれも閉じることができない門を、あなたの前に開いておいた。」と言われたのは、会堂はあなたがたに門を閉ざしたけれども、わたしがその全権で、あなたがたには、神の国に入る、新しいエルサレムに入る門を開けておく、ということです。黙示録最後の約束に、神の聖所と新しいエルサレムに入る約束をイエス様は与えておられます。21章には、一日中、都の門は閉じることがないとあります(25節)。主はご自分の都に彼らが入ることができるようにしていただきます。日本には、村八分という言葉があります。実際に、村の共同体の便益の八割を得られないようにさせて、生き殺しをさせました。その恐怖が植え付けられて、共同体に反することは言えないようにさせました。信仰告白によって、自分も大きな不利益を被るかもしれませんが。しかし主は、だれも閉じることのできない門を、開いてくださっているのです。

イエスが言われた彼らをほめる言葉に注目してください。一つは、「あなたには少しばかりの力があって」であります。二つ目は、「わたしのことばを守り」であります。そして三つ目は、「わたしの名を否まなかったから」であります。

一つ目、「あなたには少しばかりの力があって」であります。彼らは必ずしも信仰をもってから長い月日が経っていなかったかもしれませんが。それほど、知識において整えられていなかったかもしれませんが。ただ福音のことばを聞いて、信じただけなのかもしれませんが。ちょうど、テサロニケ

の信者たちが、新しく信じたばかりなのに迫害を受けていた、という状況に似ていたかもしれせん。しかし、「少しばかりの力」があったのです。ここで大事なのは、私たちにはわずかな力でのいいのだ、ということです。どんなに慰められ、励まされる言葉ではありませんか。その力が、自分たちの力ではなく、主から来ているものであるという点が大切です。どんな小さなことであっても、主の御霊からいただいた力によって、忠実に神に仕えます。自分のできることをするのではなく、どんな小さな事柄でも、主に祈り、主から知恵をいただき、力をいただき、御霊に導かれます。どんなに僅かなことでも、例えばトイレ掃除を教会で行うにしても、その掃除を主に対して行ないます。

そして二つ目、「わたしのことばを守」ることです。これは、主が命じられていること、主が願われていること、望まれていることを、しっかりと守っている、保持しているということです。そのわずかな力でのいいのです、主のことばをしっかりと守ります。そして三つ目、「わたしの名を否まなかった」であります。これは、イエス様を人の前で認めれば、彼らは門前払いされます。そうであっても、彼らは御名を否むことはありませんでした。「マタ 10:32 ですから、だれでも人々の前でわたしを認めるなら、わたしも、天におられるわたしの父の前でその人を認めます。」

2A 教会を愛される主 9-10

1B 偽ユダヤ人に対する勝利 9

⁹ 見よ。サタンの会衆に属する者、すなわち、ユダヤ人だと自称しているが、実はそうではなく、嘘を言っている者たちに、わたしはこうする。見よ。彼らをあなたの足もとに来させてひれ伏させ、わたしがあなたを愛していることを知らせる。

先ほど話した不信者のユダヤ人についてのことです。「サタンの会衆」とイエス様ははっきりと語られます。それはユダヤ教の会堂、シナゴークがサタンからのものだ、ということではなく、キリストに愛された者たちを追放し、中傷することは、その背後にサタンがいるからだということです。イエス様が、「私たちの父はアブラハムです」と言い張るユダヤ人に対して、「あなたがたの父は悪魔です。悪魔は初めから偽りを言い、人殺しです。」と言われました。彼らは、父祖アブラハムを誇り、神を誇っていましたが、心はイエス様に対する殺意で一杯になっていたからです。

フィラデルフィアは、ギリシア文化が強いところだと言いましたが、ギリシア思想に影響された、ユダヤ人たちがいたと言われています。ギリシアの神々への儀式の中で、去勢することがありました。そこで異邦人に対しても、「私たちは割礼をするが、あなたがたの去勢と変わらない。」と教えていたようです。だから、イエスを信じたとしても、割礼を受けなさいと言って改宗者にさせようとしていたようです。これは、まさにユダヤ主義者がしていたことで、異邦人はただ信仰によって清められるという恵みに反します。そうすると、列記とした異邦人が会堂の中に入っているのです。これは、ローマ当局に知られたらヤバい、と思ったことでしょう。またユダヤ人でないもの、改宗者でないものが会堂に入っている、と思ったことでしょう。そしてローマとしても、異邦人が唯一神を拝ん

でいるとは、けしからんと思ったと思います。こうやって、ユダヤ人の社会からも、ローマ社会においても、彼らはつまはじきにされたのです。キリスト者は、往々にして、既存の共同体から、このようにして、つまはじきにされます。しめだされます。

しかしイエス様は、「見よ。彼らをあなたの足もとに來させてひれ伏させ、わたしがあなたを愛していることを知らせる。」ということをされます。これは、キリスト者が神の国においてキリストの王権の中で、共に統べ治めるということです。そして、これら迫害した者たちが神の国に入ることができず、塵を舐める屈辱を味わうということです。先にお話した、殉教した魂が、「なぜ復讐なさらないのでですか？」という訴えに対して主がお答えになられた、ということです。彼らはずっと、これら信者たちが悪者としており、自分たちが正しいとしていましたが、それが逆転するのです。主は、必ず報いてくださることを約束し、それでご自身が確かに彼らを愛しておられることを示しています。

2B 全世界の試練からの守り 10

¹⁰ あなたは忍耐についてのわたしのことばを守ったので、地上に住む者たちを試みるために全世界に來ようとしている試練の時には、わたしもあなたを守る。

9 節は、主が神の国に彼らを招き入れてくださることの約束ですが、神の国の到来の前に、全世界に試練があります。2 章で、ティアティアラの教会のところで、悔い改めないなら「大きな患難の中に投げ込む」と言われていました(2:22)。6 章以降に、この全世界に対する試練、また大きな患難を、主ご自身が降り注ぐ幻が始まります。フィラデルフィアの人たちには、この試練の時から彼らを守ってくださることを、イエス様は約束しておられます。

「あなたは忍耐についてのわたしのことばを守った」とありますが、ここでの忍耐は、耐久力というのに近い言葉でしょう、英語では perseverance であります。難しい言葉で「堅忍」と言います。困難にしっかりと耐えて、最後まであきらめないことを意味します。私たちがいかに、忠実であることが大切かを教えてください。今から、何か特別なことを行う必要はない。ただ、忍耐についてのイエスのことばを守るだけで良い、ということです。ティアティアラの教会に対しても、「わたしはあなたがたに、ほかの重荷を負わせない。ただ、あなたがたが持っているものを、わたしが行くまで、しっかりと保ちなさい。」と言われていました(2:15)。少しばかりの力でいいのです、それをもって、イエスさまのことばを守るのです。そうすれば、主が大きな試練から守ってくださいます。

ところで、「試練の時には」と訳されている言葉は、「試練の時から」と訳することができます。その時から彼らを守ると訳することができます。つまり、その時を経験しないで済むようにしてくださる、ということです。地上には患難が降りますが、その患難を経ることがないようにしてくださるということです。「I テサ 5:9 神は、私たちが御怒りを受けるようにはなく、主イエス・キリストによる救いを得るように定めてくださったからです。」主が天から來られて、私たちを空中にまで引き上げて下さ

り、後に来る大患難から私たちを免れてさせていただきます。なぜなら、この世で受ける患難は、サタンからのものであり、サタンからの苦しみですが、終わりの日の患難は、そのような苦しみを与える者たちに対する神の報いであり、罪と不正を裁かれる、神の御怒りだからです。「ロマ 5:9-10 ですから、今、キリストの血によって義と認められた私たちが、この方によって神の怒りから救われるのは、なおいっそう確かなことです。10 敵であった私たちが、御子の死によって神と和解させていただいたのなら、和解させていただいた私たちが、御子のいのちによって救われるのは、なおいっそう確かなことです。」

3A 主の来臨 11-13

1B 自分の冠 11

¹¹ わたしはすぐに来る。あなたは、自分の冠をだれにも奪われないように、持っているものをしっかり保ちなさい。

イエス様は、「すぐに来」られます。これは、「来る時には、遅れることはない。すみやかに来る。」ということです。思いがけない時に、来られます。自分にはどうすることもできない、神だけの持つておられる定まった時があり、神にいつも信頼して、神を待ち望んで、それでその時が来た時にはいつでも用意ができています、ということです。フィラデルフィアの人々には、既に、「あなたの冠」とあります。主が、信仰を全うする者たちには、義の冠や命の冠が用意されているとの約束がありますが、主がその信仰に対して栄誉と称賛を用意しておられます。その誉れを冠は表しています。そして、それが奪われないように、「持っているものをしっかり保ちなさい」とあります。そうなんです、既に持っているものを守るのです。

2B 神殿の柱 12

¹² わたしは、勝利を得る者を、わたしの神の神殿の柱とする。彼はもはや決して外に出て行くことはない。わたしは彼の上に、わたしの神の御名と、わたしの神の都、すなわち、わたしの神のもとを出て天から下って来る新しいエルサレムの名と、わたしの新しい名とを書き記す。

これは、結論から申し上げますと、天における神の都、天のエルサレムに確かに入ることができる保証であります。救われているという保証です。黙示録 21-22 章に、最後の幻として鮮やかに、詳細に描かれています。

ここでは、フィラデルフィアのことをイエス様は意識しておられます。「わたしの神の神殿の柱」でありますが、この町は断層の上であり、地震が起こる度に大きな被害を受けていました。しかし、大柱はそのまま立っている場合が多いです。彼らが地震で倒れる柱を見ているなかで、自分は柱として立っていることができるという保障です。それから、「彼はもはや決して外に出て行くことはない。」とあります。これも先に話しましたように、ユダヤ教会堂から追い出されている彼らによって、

都から出されることはないというのは、とてつもない安心感をもたらします。そもそも柱となっているのですから、出て行きようがありませんね！

そして、神の都の中でイエス様のものであるという認証が押されています。「わたしの神の名」「わたしの神の都」「わたしの神のもと」とイエス様は、「わたしの」を繰り返しておられます。イエス様がこの新しい都、そして父なる神がご自身のものであることを強調し、その所有権の中であなたがたを守る、と言われているのです。22章5節、新しい都にいる者たちに、「彼らの額には神の名がついている。」とあります。そして、「新しいエルサレムの名」というのは、22-21章にある天から降りてくる新しいエルサレムのことです。

そして「新しい名」を書き記す、というのは、全てが新しくされたその都に住む時に、新しくされた関係の中でイエス様のものとなっているということでもあります。これも当時の町の建物にありふれていた光景で、彼らにはすぐに心に入りました。柱には、その建物の建築に貢献した人や、町の中で英雄的な活躍をした人など、名が書き記されています。カペナウムに行くと、そこにあるシナゴグの柱には、名前が刻まれているの確認することができます。そのようにして、主の自分の名を、しかも新しい名で覚えていただけるということです！

3B 御霊の語られること 13

¹³ 耳のある者は、御霊が諸教会に告げることを聞きなさい。』

私たちが、彼らと同じように主に対して、わずかな力でもそれをしっかりと守っているならば、主は私たちの前に広い門を開けておいてくださいます。それは、神の国に入る門であります。大きな力を要しません、イエス様の教会において、ただイエス様に言われることを聞いて、それに誠実に、へりくだって、忠実に従うことです。